11　教育活動の充実のために

幼稚園における人権教育

幼児期は、自他の認識や自意識は明確ではないが、他者の存在に気付く時期であり、遊びを中心とした友達との関わり合いの中で、社会性の原型ともいえるものを獲得していく。

また、相手との情緒的な絆によって自分の存在に安心感をもつ傾向が認められる。幼児は、特定の友達の存在をよりどころにして人との関わりを広げていく。

さらに、表情から他者の情緒を理解し、生活の繰り返しの中で、物や出来事に関連させて友達を認知するため、表面的な理解に止まる傾向がある。幼児にとっては、生活の場自体が学びの場であり、人権感覚の芽生えの場でもある。

こうした幼児期の特徴を踏まえて、遊びを中心とする生活の場で、自分を大切にする感情とともに、他の人のことも思いやれるような社会的共感能力の基礎をはぐくむという視点が必要である。

言語活動の充実

言語に関する能力の発達と思考力等の発達が関連していることを踏まえ、幼稚園生活全体を通して、幼児の発達を踏まえた豊かな言語環境を整え、充実を図ることが求められている。

日々の幼稚園生活において、教師が幼児一人一人にとって豊かな言語環境となることを自覚する必要がある。教師の言葉や行動する姿等が幼児の言動に大きく影響することを認識しておくことが大切である。

経験したことや考えたこと等を自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度をはぐくみ、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を育成することが大切である。子どもをはぐくむ言葉の働きとしては、次の４点が考えられる。

○人と人との絆（きずな）を「つなぐ」　○互いの思いを「伝え合う」
○知識や考え方を「広げる」　○響きやリズムを一緒に「楽しむ」

幼小接続

幼稚園では計画的に環境を構成し、遊びを中心とした生活を通して体験を重ね、一人一人に応じた総合的な指導を行っている。一方、小学校では、時間割に基づき、各教科の内容を教科書等の教材を用いて学習している。このように、幼稚園と小学校では、子どもの生活や教育方法が異なる。このような生活の変化に子どもが対応できるようになっていくことも学びの一つとして捉え、教師は適切な指導を行うことが必要である。

一方、小学校においても、幼稚園から小学校への移行を円滑にすることが求められる。特に、低学年においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して、はぐくまれてきたことを生かしながら教科等の学びにつながるようスタートカリキュラムを編成し、その中で、生活科を中心に合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定等も行われている。

子どもの発達と学びの連続性を確保するためには、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに、幼稚園と小学校の教師が接続期カリキュラムに係る意見交換や合同研修の機会などを設け、共に幼児の成長を共有することを通して、幼児期から児童期への発達の流れを理解するとともに、それぞれの教育方法や環境の改善と工夫を行い、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続が図られることが大切である。

見通しと振り返り

幼児は、幼稚園生活の中で、楽しかったことや嬉しかったこと、悔しかったこと等を振り返り、教師や他の幼児とその気持ちを共有するなどの体験を重ね、次の活動への期待や意欲をもつようになっていく。また、一緒に活動を楽しみながら、その活動の流れや必要なもの等が分かり、もう一度やりたいと思ったり、自分たちで準備をして始めたりするようにもなる。教師は、発達の過程を踏まえて、幼稚園生活の中で見通しをもったり振り返ったりする機会を捉え、幼児の実態に即して、体験を積み重ねていけるように工夫していくことが求められる。その際、幼児の気持ちを受け止め、幼児の視点から次の活動につないでいくことが大切である。

教育活動の評価と生かし方

教師は、日々の保育の営みの中で一人一人の幼児の発達の姿から指導が適切であったかどうか振り返る必要がある。単に「できる、できない」、「早い、遅い」、「分かる、分からない」などの結果だけを見て評価するのではなく、保育の中で、幼児の姿がどのように変容していくか、その過程を捉え、指導の手掛かりを考えていくことが大切である。

すなわち、保育における評価は、幼児理解と教師の指導の改善の両面から行われることが大切である。

＜幼児理解に関して＞

・幼児の生活の実態についての理解が適切であったか。

・幼児の発達についての理解が適切であったか。　など

＜指導の改善について＞

・指導計画で設定した具体的なねらいや内容が適切であったか。

・環境の構成が適切であったか。

・幼児の活動に沿って必要な援助が行われたか。　など

保育の中で幼児がどのように変容しているかを捉えながら、そのような姿が生み出された様々な状況について適切かどうかを検討して、保育をよりよいものに改善するための手掛かりを求めることが評価であるといえる。

評価の妥当性や信憑性が高められるよう、例えば、他の教師等からも情報を得て、より多面的に幼児を捉える工夫を行う。組織的・計画的な取組を推進すると共に、次年度は小学校等にその内容が適切に引き継がれるようにすることが必要である。

資料⑰ P172

学期末の評価と新学期の計画・準備

教師は、これらの評価を記録に残し、自らの幼児理解や指導の在り方を振り返り、それを他の教師と話し合うことによって、多面的な幼児の姿や保育の課題等に気付き、幼児理解や指導についての考え方を深めることができる。さらに、その気付きを指導計画の改善に生かすことが大変重要である。幼児にとっての幼稚園生活は、担任を中心とした学級を基盤にして営まれている。したがって、担任が学級経営をどのように行うかということが、幼児の幼稚園生活や一人一人の育ちに大きく影響することになる。

学期末の評価は日常の担任自身の在り方も含めて、学級経営全般について基本に立ち返って見直す大切な節目としていかなければならない。

指導要録

指導要録とは、幼児の学籍並びに指導の過程とその結果の要約を記録し、その後の指導及び外部に対する証明等に役立たせるための原簿となるものである。各園の設置者が示す様式に従い、各園で作成する。学校教育法施行規則第24条第２項において、幼児の指導要録の抄本又は写しを作成し、小学校等の校長に送付しなければならないこととなっている。適切に送付することも含め、小学校等との情報の共有化を工夫する必要がある。

作成に当たっては、小学校等での指導に生かされるよう、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用して幼児にはぐくまれている資質・能力を捉え、指導の過程と育ちつつある姿を分かりやすく記入するように留意する必要がある。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が到達すべき目標ではないことに留意し、項目別に幼児の育ちつつある姿を記入するのではなく、全体的、総合的に捉えて記入することが大切である。